

## レビ記19章「敬神愛人」

### 1A 神への敬い 1-8

1B 聖なる者 1-2

2B 神への献身 3-4

3B 絶えぬ交わり 5-8

### 2A 人への慈しみ 9-22

1B 落ち穂 9-10

2B 偽り 11-12

3B 隣人の虐げ 13-14

4B 公正な裁判 15-16

5B 兄弟への憎しみ 17-18

6B 異種混淆 19-22

### 3A 主の土地に対する敬い

1B 果実 23-25

2B 住人 26-31

3B 老人 32

### 4A 公平な扱い 33-37

1B 寄留者への愛 33-34

2B 正しい量り 35-37

## 本文

レビ記 19 章を開いてください。私たちのレビ記の学びは、聖別によって歩むことについて学んでいっています。主のところに近づいた者が、世に属するのではなく、別たれて神のものとして生きることを意味します。世の中には生きているけれど、世と交わっていません。17 章では、動物を屠ることについて、それを主へのいけにえとして献げることを学びました。異教のいけにえがあり、そちらに逸れて行く恐れがあるからです。18 章では、性的な聖さです。エジプトやカナンにおける、性的に逸脱した風習に倣うことのないように、警告を与えられました。そして 19 章は、主の与えられた十戒の適用です。主の与えられた戒めを、生活の中にどのように活かせばよいのかを、主ご自身が指導しておられます。

その中で、この章には、イエス様の命令の中で、最も大切な戒めと言われた、「隣人を自分自身のように愛しなさい。」が出てきます。律法の本質は、神を敬い、人を愛することです。昔、明治時代の哲学者が、「敬天愛人」という言葉を造りました。天を敬う、つまり天におられる神を敬い、そして人を愛するということです。十戒やその他の律法の本質が、神を、心を尽くして愛して、敬うこと

と、人を自分自身のように愛していくことに要約されます。このことを見て行きます。

## 1A 神への敬い 1-8

### 1B 聖なる者 1-2

<sup>1</sup> 主はモーセにこう告げられた。<sup>2</sup>「イスラエルの全会衆に告げよ。あなたがたは聖なる者でなければならない。あなたがたの神、主であるわたしが聖だからである。

レビ記のテーマである言葉が出てきました。主が聖なる方なので、私たちが聖なる者でなければいけないという召しです。新約聖書で、ペテロが第一の手紙でここを引用しています。「1:14-16 従順な子どもとなり、以前、無知であったときの欲望に従わず、むしろ、あなたがたを召された聖なる方に倣い、あなたがた自身、生活のすべてにおいて聖なる者となりなさい。「あなたがたは聖なる者でなければならない。わたしが聖だからである」と書いてあるからです。」

従順な子どもとなり、とありますが、これは神が父であられ、父がこうしなさいと言われているのだから、あなたがたは従順になりなさい、ということです。19章には、いや、18章から数多く出てきている言い回しが、「わたしはあなたがたの神、主である。(4節など)」であります。ただ、この方が神であり、主であるというだけで、従いますというのが、私たちの姿勢であるべきです。そして、私たちには様々な欲望がありますが、それに従うのではなく、聖なる方に倣うということです。

### 2B 神への献身 3-4

<sup>3</sup> それぞれ、自分の母と父を恐れなければならない。また、わたしの安息日を守らなければならない。わたしはあなたがたの神、主である。<sup>4</sup> あなたがたは偶像の神々に心を移してはならない。また、自分たちのために鑄物の神々を造ってはならない。わたしはあなたがたの神、主である。

主がモーセにシナイ山の上で与えられた十戒について、改めて語っておられます。初めに、「自分の母と父を恐れなければならない」とあります。父ではなく母から語られています。身近なところから語っているんですね。自分の生活で働きに出ている父よりも、家を切り盛りしている母のほうが身近です。そして、両親に従うことから、安息日に移っています。そう、親というのは神の権威を代理して表している存在です。そして、安息日を守ることによって、神を敬います。それで、偶像礼拝から離れなければいことを教えています。

### 3B 絶えぬ交わり 5-8

<sup>5</sup> あなたがたが交わりのいけにえを主に献げるときは、自分が受け入れられるように献げなければならない。<sup>6</sup> それを献げた日と、その翌日に、それを食べなければならない。三日目まで残ったものは火で焼かななければならない。<sup>7</sup> もしも、三日目にそれを食べるようなことがあれば、それは不浄なものとなり、受け入れられない。<sup>8</sup> それを食べる者は咎を負う。主の聖なるものを冒したからであ

る。その人は自分の民から断ち切られる。

交わりのいけにえについての教えです。交わりのいけにえは、脂肪の分は祭壇で火で焼きますが、肉の部分は一部は祭司の分け前となり、残りが献げた者の分になります。主との交わりが、ここで可能となるのです。それを三日目にまで残しておいていけないという戒めです。私たちは、なるべく長く持たせて、あまりいけにえを献げないようにしようと思うのが、欲として出てしまいます。けちってしまうのです。けれども、主との交わりは以前に交わったことを今の自分に持ち越すことはできません。主と交わったのであれば、また新たに交わる必要があります。三日目は、主がよみがえられた期間でもありますが、私たちが生きた主にお会いするならば、改めて交わるために自分を献げないといけないのですね。

## **2A 人への慈しみ 9-22**

ここまでが、神を敬うことについて、どのように聖く歩めばよいのかの教えでした。次は、十戒に通底している神の思いと言ったらよいでしょうか。十戒を主が与えられたのには、大前提があります。出エジプト 20 章 2 節に、「わたしは、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出したあなたの神、主である。」とあります。それから、「あなたは、わたし以外に、ほかの神があってはならない。」と続きます。奴隷の家から導き出した神であるということを知ることは大事です。だから、奴隷の身の人々を憐れまないといけないということです。虐げられている人、貧しい人に、憐れみを示すということが、憐れみを受けた者たちが応答としてしていく必要があるということです。

ですから、十戒が与えられた直後、主が裁き司たちのための定めを与えられた時に、出エジプト記 21 章では、ヘブル人の奴隷は七年目には自由人として解放しなければいけない、と教えておられます。こうした憐れみも、聖なる主にふさわしいことであり、私たちも憐れみを示すことで、聖なる歩みをするのです。

## **1B 落ち穂 9-10**

<sup>9</sup> あなたがたが自分の土地の収穫を刈り入れるときは、畑の隅々まで刈り尽くしてはならない。収穫した後の落ち穂を拾い集めてはならない。<sup>10</sup> また、あなたのぶどう畑の実を取り尽くしてはならない。あなたのぶどう畑に落ちた実を拾い集めてはならない。それらを貧しい人と寄留者のために残しておかなければならない。わたしはあなたがたの神、主である。

主の与えられた、独創的な慈善の方法です。収穫の時に、敢えて取り残し、その落ちた実を拾わないということです。貧しい人や寄留者には、分け与えます。日本人なら、きちんと隅々まで刈り取らないといけないと思ってしまうでしょう。しかし、いい加減にして、気前よく分け与えるのは、聖いことなのです。アメリカでは、当たり前のようにスーパーマーケットは、賞味期限が近づいている食べ物を、教会などの慈善団体に無償で提供します。そして、ホームレスの人々に分け与えるの

です。落穂拾いにある神の憐れみと、同じ考え方ですね。

落穂拾いで有名なのは、ルツの物語ですね。姑のナオミも自分もどちらもやもめでした。ですから、このままでは野垂れ死になっても仕方がない状態です。けれども、律法にしたがって落穂拾いをささえている、ボアズという有力者の畑でルツが働きました。そこで、ボアズの目に留まり、ついにはルツと結婚します。そしてそのひ孫がダビデであり、つまり、イエス・キリストの先祖になります。

## 2B 偽り 11-12

<sup>11</sup> 盗んではならない。欺いてはならない。互いに偽ってはならない。<sup>12</sup> あなたがたは、わたしの名によって偽って誓ってはならない。そのようにして、あなたの神の名を汚してはならない。わたしは主である。

人を慈しむ、愛するということにおいては、盗みをしない、偽らないというのは大切な要素でしょう。盗んではならない、偽りの証言をしてはならないと十戒にあります。さらに、偽って誓うことには、人に対して傷を与えるだけでなく、神に対して傷を与えます。神の名によって誓っているのですから、それを行わないと、神の名を唱えるだけでもつまずきが増えます。

## 3B 隣人の虐げ 13-14

<sup>13</sup> あなたの隣人を虐げてはならない。かすめてはならない。日雇い人の賃金を朝まで自分のもとにとどめておいてはならない。

虐げるというと、何かむちを打つような光景を思い浮かぶかもしれませんが、日雇い人の賃金を、ただ朝まで留めていたら、それは虐げになるのです。なぜなら、日雇い人は、文字通りその日に食べるもののために働いているのであり、賃金を留めることはそのまま、彼らを飢えさせることに他ならないのです。私たちが、一見、していることは大したことがないように見えても、相手の状況に無知、無感覚であれば、酷い仕打ちをするということはありません。

<sup>14</sup> あなたは耳の聞こえない人を軽んじてはならない。目の見えない人の前につまづく物を置いてはならない。あなたの神を恐れよ。わたしは主である。

人間の欲望は、尽きることがありません。人の窮状を見て見ぬふりをするだけでなく、敢えてその弱さに付け込んで、意地悪するのです。障害者ではなくとも、人は弱い部分があると分かると、支配欲を満たすために、敢えてその弱さに付け込む傾向があります。相手は言い返すこともできません。しかし、キリスト者は聖く生きるならば、彼らは見えない、聞こえないですが、主は見ておられ、聞いておられます。主を畏れる必要があるのです。

#### 4B 公正な裁判 15-16

<sup>15</sup> 不正な裁判をしてはならない。弱い者をひいきしたり強い者にへつらったりしてはならない。あなたの同胞を正しくさばかなければならない。

今、弱い人、強い人の話をしましたが、ここでもう一つ大事な神のご性質があります。この方は正しく、公正だということです。強い人が弱い人を虐げることもあります。その反動で、弱い人をひいきにしてしまうことがあります。弱い人も、強い人も、福音によれば、主の前では同じように罪人であることを思い出す必要があります。その人の行ったことで、裁き司は裁かないといけません。人の心にある、ひいきにするとか、へつらうことから守られて、心を聖く保つことができます。

<sup>16</sup> あなたは、民の中で人を中傷して回り、隣人のいのちを危険にさらすことがあってはならない。わたしは主である。

裁きの中で、やってはいけないことは中傷です。中傷の中身次第では、人が死刑に定められることがあるのです。中傷が殺人の罪と変わらないほどの力を持っているのです。しかし、裁判の中だけでなく、どんな時にも中傷は罪です。今、ネット社会の倫理がなくなっていて、人目に多くさらされている有名人が自殺する事例が絶えません。中傷が人を事実、殺しているのです。

#### 5B 兄弟への憎しみ 17-18

<sup>17</sup> 心の中で自分の兄弟を憎んではならない。同胞をよく戒めなければならぬ。そうすれば、彼のゆえに罪責を負うことはない。<sup>18</sup> あなたは復讐してはならない。あなたの民の人々に恨みを抱いてはならない。あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。わたしは主である。

レビ記 19 章、それほど読まない箇所だと思いますが、実は、イエス様が最も大切な戒めとして語られていた戒めであり、非常に大切な箇所なのです。「マル 12:28-31 律法学者の一人が来て、彼らが議論するのを聞いていたが、イエスが見事に答えられたのを見て、イエスに尋ねた。「すべての中で、どれが第一の戒めですか。」イエスは答えられた。「第一の戒めはこれです。『聞け、イスラエルよ。主は私たちの神。主は唯一である。あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』第二の戒めはこれです。『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。』これらよりも重要な命令は、ほかにありません。』」

ですから、私たちが律法について見る時、聖なる歩みというのは、実は隣人を省みることに深く関わることなのだ、ということが分かりますね。パウロが、この戒めを守れば他の戒めも守ることになると、手紙で解説しています。「ロマ 13:9-10 「姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。隣人のものを欲してはならない」という戒め、またほかのどんな戒めであっても、それらは、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」ということばに要約されるからです。愛は隣

人に対して悪を行いません。それゆえ、愛は律法の要求を満たすものです。」

そして、この戒めの文脈は、兄弟を憎んではならない、復讐してはならない、恨みを抱いてはならないというところで語られています。兄弟なのだから、戒めなさいと言っています。ここが大事です。日本では、戒めることは避けようとしています。むしろ、相手と関係を切ることで処理しようとしています。和の精神は、悪い方向に進むと、違ったかたちでの憎しみを加えることとなります。恨んだり、憎んだりする方法は、この箇所では、兄弟としての絆を切るような行為です。ヨハネ第一では、兄弟を憎む者は、神から生まれていないと断じていて、そしてそうした者たちが仲間から離れることについて書いてあります。イエス様が言われました。「マタ 18:15 また、もしあなたの兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところで指摘しなさい。その人があなたの言うことを聞き入れるなら、あなたは自分の兄弟を得たこととなります。」

#### 6B 異種混淆 19-22

<sup>19</sup> あなたがたは、わたしの掟を守らなければならない。あなたの家畜を種類の異なった家畜と交わらせてはならない。あなたの畑に二種類の種を蒔いてはならない。また、あなたは二種類の糸で織った布地の衣服を身に着けてはならない。

ここは、神の創造の秩序を重んじた戒めになっています。主が家畜を造られた時、それぞれの種類にしたがって造られました。また、植物もそれぞれの種にしたがって造られました。この種類は細かい種類ではなく、大まかな種のことでしょう。例えば、牛と羊を交尾させるようなことはしてはならないということです。こうした区別を重んじるところに、神に聖なる姿が現れています。それが、私たちの着る衣服でも表す必要があるとしていて、二種類の糸で織った布地ですが、縮み具合とか、洗う時の注意であるとか、異なる物を一つの衣服にすると、おかしくなります。

18 章では、男と男が寝ることについて、そして、人が動物と寝ることについて、道ならぬことだと書いてありました。これは、神の区別を超える動きです。今、それがとても流行しています。トランスという言葉がありますが、「超える」という意味です。性別を超えた人が、トランスジェンダーと呼ばれます。神の定めた生物学的な性別を超えようとしています。それで、トランスエイジも生まれています。本当は 40 歳なのに 20 歳だと自認する人です。そして、トランススピーシーズが現れています。若い女性が、自分が猫だと自認することです。これらはみな、主から与えられた聖なる区別を否定する行為です。

<sup>20</sup> 男が女と寝て交わり、その女が別の男に決まっている女奴隷であって、まだ贖われていないか、あるいは自由を与えられていない場合は考慮する。女が自由の身でないので、彼らは殺されない。

<sup>21</sup> その男は、主への償いとして、代償のささげ物の雄羊を会見の天幕の入り口に持って行く。<sup>22</sup> 祭司は彼が犯した罪のために、その代償のささげ物の雄羊によって、主の前で彼のために宥めを行

う。彼はその犯した罪を赦される。

男と女の間にある区別を犯した場合の代償です。もし女が自由な女、奴隷でなければ、姦淫は死罪です。婚約した女でも、彼女が凌辱された以外では、死罪になります。20 章に書かれています。なぜか？一度結ばれて一つになっているところに、他のものが立ち入ったからです。主は、二つの別々の性が一つになる結婚を、ご自身が一つであるように聖なるものとみなしておられます。

けれども、ここでは女奴隷です。まだ自由に決められない人であります。ですから、責任を問われません。しかし、この男は責任を負います。それは女は初めの婚約している男から、その女をもらわないといけません。なので、この本文には書かれていませんが、償い金を払うことでしょう。さらに、代償のささげ物を献げます。

このように、奴隷制度が存在している中でも、女性としての尊厳があり、また男女の結婚制度も残っています。今日、こうした神のもうけられた区別を壊そうとする動きがあり、例えば複数恋愛ならず、複数婚というものさえあります。家族がいるのに、妻も夫もそれぞれ彼氏、彼女がいて、しかも同居までしてしまうようなものです。ここには、「自分の気持ちさえよければ」というものがあります。神の設けられた秩序や区別を壊すのです。ダニエル書 7 章には、獣、反キリストの預言があり、「いと高き方に逆らうことばを吐き、**・・彼は時と法則を変えようとする。**」とあります(25 節)。反キリストの現れは近いと感じます。

### **3A 主の土地に対する敬い**

#### **1B 果実 23-25**

<sup>23</sup> あなたがたが、かの地に入り、どんな果樹を植えても、その実はまだ禁断のものと見なさなければならぬ。三年の間、それはあなたがたにとって禁断のものであり、食べてはならない。<sup>24</sup> 四年目に、その実はすべて聖なるものとなり、主への賛美のささげ物となる。<sup>25</sup> 五年目に、あなたがたはその実を食べることができる。あなたがたの収穫を増すためである。わたしはあなたがたの神、主である。

新しく植えた果樹の木ですが、約束の地では、オリーブ、いちじく、そして、なつめやし、ぶどうなどが主なものです。これらを植えたとしても、三年が経たないと、食べることでできる実は結ばれません。食べることでできるまで、待たないといけないのです。そして、その待った結果、実が結ばれます。しかし、それは主が実らせてくださったことをお祝いするために、賛美のささげ物として献げます。そして五年目以降に、食べることができます。初めの四年間、食べなかったとしても五年目以降には、もっと多くの収穫を期待することができます。

神は、このことを農業の観点からではなく、霊的な原則としても教えておられるでしょう。一つの

木が実を結び、それを受け取ることができるまでは時間がかかるということです。イエス様は、ご自身がぶどうの木で私たちは枝であると言われました。また、種蒔きの喩えでも、良い土地に落ちた種が、何十倍も実を結ぶとあります。私たちが、拙速に実が十分に結ばれていないのを見て、自分たちの行いで成し遂げようとしたら、初めからやり直しです。アブラハムが、イサクによって祝福されるのに、その前にイシュマエルをハガルによって生んで、それで対立や混乱がその後起こりました。実を結び、それが他の人々の祝福になるまでは十分な時間が必要です。

そして三年経った後の四年目は、賛美のささげ物となっています。私たちがまず、しなければいけないことは、結ばれた実をすぐに食べるのではなく、主に賛美としてお返しすることです。「ヘブル 13:15 それなら、私たちはイエスを通して、賛美のいけにえ、御名をたたえる唇の果実を、絶えず神にささげようではありませんか。」主に賛美することを怠ることなく、それから主からの恩恵である実を、その祝福を食べて行くのです。要は、主に賛美を献げようということです。

## 2B 住人 26-31

<sup>26</sup> あなたがたは何でも血が付いたままで食べてはならない。まじないをしてはならない。占いをしてはならない。

ここからは、周りの異教の慣わしに倣ってはいけないという戒めです。血をついたまま食べることについては、すでに学びました。異教との結びつきがあり、血を食べて行く儀式があります。そして、血はいのちそのものであると主が明らかにしておられました。

そして、まじないや占いも避ける必要があります。そこに、悪霊が働いている場合が多いからです。人が不安になったりする時に、頼れるものでまじないや占いをしますが、私たちには主なる神への希望と、その約束のみことばがあります。そういったまじないに頼ると、主の霊と自分の霊の間にある交わりが断ち切られることとなります。他の霊が入って来るのです。これを避けなければいけません。

<sup>27</sup> あなたがたの頭のもみあげを剃り落としてはならない。ひげの両隅を損なってはならない。<sup>28</sup> あなたがたは、死人のために自分のからだに傷をつけてはならない。また自分の身に入れ墨をしてはならない。わたしは主である。

今、イスラエルに行けば、頭のもみあげを剃り落とさないでいる人、ひげの両端をそのまま残している人々に出会います。ユダヤ教の超正統派の人たちです。このみことばを、そのまま守っています。確かに、男にとってあごひげがあるのは威厳を表していましたし、そうした表現が聖書にはあります。けれども、文脈が大事です。剃り落とすことが、異教の儀式の中にあつたのです。そして、入れ墨もそうですが、死人のために自分の体を傷つけていて、その延長で入れ墨をしま



す。死人のために何か儀式を行うことが、死人の霊に仕えることがいけないのであって、そこにまつわる慣わしに従わないということが大事です。

ですから、私たちは、死者の霊に仕えるような行為について、主に対してもそうだし、周りの人々のためにも、それを避けるべきです。仏式の焼香、それから遺影の前での拝礼も、周りの人が見たら、死者の霊に仕えているということがはっきりと分かります。私たちの神は、死んだ人々ではなく、生きている人々のための神です。ですから、生きているご遺族の慰めのために工夫をして動いていくべきです。

<sup>29</sup> あなたの娘に淫行をさせて汚してはならない。地が淫行に走り、地が淫らな行為で満ちることのないようにするためである。<sup>30</sup> あなたがたはわたしの安息日を守り、わたしの聖所を恐れなければならない。わたしは主である。<sup>31</sup> あなたがたは霊媒や口寄せを頼りにしてはならない。彼らに尋ね、彼らによって汚されてはならない。わたしはあなたがたの神、主である。

娘に淫行をさせること、霊媒や口寄せを頼りにすること、そしてその間に安息日を守り、聖所を恐れるということは、すべてつながっています。娘を淫行させるというのは、異教の宮において女祭司として働かせることです。そして霊媒や口寄せは、女が行います。肉においても、霊においても、そのようにしてこの地を汚してはいけません。霊媒は霊的な汚れであり、淫行は肉の汚れです。どちらも汚します。そうではなく、安息日の中で聖所を敬う、つまり礼拝することが大事なのだ、ということです。私たちが、主に対する礼拝をしっかり行っている中で、周りの異教の影響や世の影響を、霊においても肉においても守られることを意味します。

### 3B 老人 32

<sup>32</sup> あなたは白髪の老人の前では起立し、老人を敬い、またあなたの神を恐れなければならない。わたしは主である。

非常に興味深い戒めです。老人を敬うこと、そこには神の聖さが表れているということです。老人を疎かにする時に、その社会に神への恐れがなくなってきたことを意味します。

白髪の人の前で起立することですが、これは、儒教の影響の強い朝鮮文化には残っているのを知っています。朝鮮半島の若い子たちが、白髪の老人が入って来たら、一斉に起立したのを見て驚きました。これは儒教の影響ですが、当時の中東の習慣にもあったのでしょうか。

### 4A 公平な扱い 33-37

最後は、公平な取り扱いをすることについての戒めです。

## 1B 寄留者への愛 33-34

<sup>33</sup> あなたがたの国、あなたのところに寄留者が滞在しているなら、その人を虐げてはならない。<sup>34</sup> あなたがたとともにいる寄留者は、あなたがたにとって、自分たちの国で生まれた一人のようにしなければならない。あなたはその人を自分自身のように愛さなければならない。あなたがたも、かつてエジプトの地では寄留の民だったからである。わたしはあなたがたの神、主である。

初めにお話ししたように、主が戒めを与えられている土台には、彼らをエジプトの寄留者であったところから贖い出した、というところから来ています。だから、寄留者であっても、同胞たちと同じように、自分自身のように愛さないといけません。キリスト者においては、キリストにあって、どの国籍の人とも一つになっています。だから、兄弟また姉妹として受け入れ、大事にしていけないといけません。

## 2B 正しい量り 35-37

このように差別してはいけない、公平に接するという姿勢、態度は、商売においても貫かれています。

<sup>35</sup> あなたがたは、さばきにおいて不正をしてはならない。物差しにおいても、秤においても、分量においても。<sup>36</sup> 正しい天秤、正しい重り石、正しい升、正しい容器を使わなければならない。わたしは、あなたがたをエジプトの地から導き出した、あなたがたの神、主である。<sup>37</sup> あなたがたは、わたしのすべての掟とすべての定めを守り、それらを行いなさい。わたしは主である。」

商売において、異なる量りを使うことは、相手に対して盗みになりますし、その犠牲は寄留者など、事情を知らない人たちが犠牲者になりやすかったのでしょう。その弱い立場を利用して虐げてはいけない、公正に取り扱いなさいということです。再びここで、主は、あなたがたは過去にエジプトにおいて寄留者だったのだと思い起こさせています。

思い出すに、私たちがアメリカに引っ越して、その到着してすぐに、自動車を購入したのですが、その自動車保険の署名が偽物でした。そして、私は自動車免許をアメリカでも取るために、ドライビングスクールに行きました。日本語で通じるところです。現金で払わないといけないと言われて不思議でした。それで電話をしたら、校長らしき女性が出て来て、「校長に対して、何という口の利き方！」と言われて、それこそ非常に横柄な態度でした。後で運輸局に目を付けられたようです。いろいろな人に騙されました。

このように、隣人を自分自身のように愛するということが、神の聖にかなうことであることがわかります。私たちが、弱い人の弱さを担うようにして、慈しみや気前良さを示して、それでみこころを行います。